

岸保さんの思い出

松野太郎（地球物理）

岸保さんの存在をはじめて知ったのは私が学部学生の時である。当時、岸保さんは地球物理の助手であったが、気象庁関係を含めた若手気象研究者のつくる「数値予報グループ」の中心的指導者として既に有名人であった。旧来の勘と経験に頼る天気予報に代えて、流体力学方程式の数値解による天気予報を日本でも実現しようという運動のリーダーだったのである。1950年代の初め、温帯低気圧の発達に関する理論で世界の気象学界にデビューした岸保さんは、その頃電子計算機（ENIAC）と共にプリンストンに生まれた数値予報プロジェクトに参加し、その成果を日本に持帰られたのであった。余談ながら、日本人で最初に電子計算機を使った人は岸保さんであると思う。

あいにく私が大学院に入るのと入れかわりに岸保さんは気象研究所に移られ、直接教えるを受けることは出来なかった。長年の運動が実を結んで、気象庁としては大英断の、当時世界最大の電子計算機であるIBM 704の導入が決定し、岸保さんは数値予報実行の準備にあたられることになった。その後間もなく、現業体制として気象庁本庁に電子計算室が設けられ、再びそこに移られた。その頃の公務員給与体系のせいで、スカウトされる度に給料が下がったそうである。岸保さんの仕事にかける熱意と欲のない人柄を表す話として仲間うちに広く知れ渡った。

1959年すなわち今から四半世紀前の4月に電子計算機による予報天気図が初めて作られた。数値予報の実用化は世界で3番目であった。この前後の岸保さんの活動ぶりは物すごく、また颯爽としていた。新しい気象学と気象技術を学び、研究する人々の中心に存在する輝かしいスターであり、その言説の影響力はカリスマ的であったと言っても過言ではない。これに多少とも批判的だったのは、他ならぬ岸保さんの後輩達、すなわち東大地球物理の気象研に巣くう助手・大学院生で、私自身もその一人であった。私の研究の出発点は、この大スターの所説にとに角反対し、何とか誤謬を発見して先輩大学院生と一緒に溜飲を下げることであった。

十年余りの後、電子計算室から東大に戻られた岸保さんによばれて私は九大から東大に移った。偶然の事情もあって、気象研究室は教授・助教授とも入れ変わって再出発の形になった。私は教育と研究という大学内の仕事に打ちこめばよかったが、岸保さんはそれではすまなかった。次第に日本の気象学界全体の中心、まとめ役となることを周囲から期待されるようになり、ご自身もその責任を感じられてこの大役に取り組んでゆかれた。気象学は多くの対象を持ち、手法もさまざまであるが、日本の大学は、それぞれが特定の分野と手法を中心として大学間分業とでも呼ぶべき体制に

なっている。このような状況で、まとめ役を果たすのは容易ではない。最初に手がけられた協同観測計画AMTEXは、理論的研究を中心として来られた岸保さんには縁遠いものであった。岸保さんは、自己を主張することを控え、みんなの研究が伸びるようにと忍耐強く努力された。かつて「数値予報の旗手」だった時代に、それに反対する保守的な勢力に対して果敢な戦いを挑んで来られた事を知っていたので、私は岸保さんの変貌に驚き、その自己犠牲的努力に頭の下がる思いをした。一方、このような一面しか知らない最近の学生諸君

には、岸保さんの昔の姿を話しても納得がゆかぬ風である。

岸保さんが青春の情熱を傾けて実現された数値予報の精度が、この1～2年、急速に向上している。この冬は何度も大雪に見舞われたが、予報はパーフェクトであった。先日の大雪の前の夕刊では、観測時の天気図上に全く見えない低気圧の発生・発達が大型コンピュータの計算結果に出ていると解説していた。岸保さんは勝利の味をかみしめて第一線を離れてゆかれるに違いない。